

世界の著名な特許にみる ————— 第38回

世紀の発明事業列伝

〈その思いつきが、時代を動かす〉

藤岡市助 その8 起死回生、大躍進していく東京電気
国内増資の挫折と米国ゼネラル・エレクトリック社（G.E.）との提携
エジソン商標の使用、川崎本社工場建設（京浜工業地帯のさきがけ）
東京電気と芝浦製作所との関係
タングステン電球実用化への発明史：クーリッジの延性タングステン発明
藤岡市助の社長復帰
白熱舎から東芝誕生への系譜：初代から8代目までの東京電気社長



芸術・科学・知財クリエイター・弁理士（雅号）

大樹 七海

はじめに

本号の焦点——藤岡市助と東京電気再建の歩み

本号では、藤岡市助が45歳を迎えた明治35年（1902年）から53歳まで、東京電気の歩みに焦点を当て、同社が倒産寸前のどん底から、日本の電気産業を牽引する大企業へと変貌していく過程をたどります。

これまでの号で述べてきたように、日本初の電球製造会社「白熱舎」は、山口県出身の同郷の志士である三吉正一と藤岡市助によって創業されました。

しかし、私財と労力を注ぎ続けた三吉正一は、資金繰りの悪化により社長の座を退き、

技術開発を担っていた三宅順佑も同社を去りました。

その後、白熱舎の後継企業であり、日本唯一の電球製造会社であった「東京電気」の社長に藤岡市助が就きます。藤岡は同郷の新庄吉生を招き、技術開発の中心を任せ、会社の存続に力を尽くしました。しかし、欧米メーカーによる安売り攻勢は激しく、東京電気の経営体力はさらに削られていきました。

こうした苦境のなかで、藤岡市助は社長職を降り、白熱舎以来、三吉・藤岡を支えてきた長富直三に経営を託しました。続いて田村英二が社長に就任し、深刻な資金難に直面する同社の再建に取り組むことになります。

東京電気が再び立ち上がり、後に日本の電

気産業を代表する企業へと成長していく物語は、まさにこの時期から動き始めるのです。

1. 東京電気の経営陣営

第4代 田村英二社長就任

東京電気の経営不振は極まり、かつ別に電車事業も手掛けねばならなかった藤岡市助は、社長の座を降り、その後を一時的に引き受けた長富直三が8か月後に離任したあと、明治35年12月25日の株主総会で、田村英二が第4代社長となります。

長富直三は、藤岡市助の9歳上で、山口県出身です。名古屋の郵便電信局次長を務めたのち、同郷の三吉正一と知り合い、三吉工場に入社後は白熱舎にも参画し、三吉正一・藤岡市助の事業を終生支え続けた人物です。

また東京電気最後の第8代社長であり、かつ初代東芝社長となる山口喜三郎の岳父でもあります。

コラム

第3代社長・長富直三の略歴

長富直三は嘉永元年（1848年）11月1日、山口県萩西分村雑色に生まれました。父は登一、母はキヨであり、長富家の長男として育ちました。

なおペリー来航は1853年なので、徳川幕府の世で、藤岡市助は1857年生まれです。

明治25年には名古屋郵便電信管理局に入り、後に同局次長を務めるなど、官界において通信行政の実務に携わりました。明治28年には三吉電機工場主・三吉正一の知遇を得て同工場に入社し、ほどなく白熱舎の事業に参画することとなります。

明治29年1月、白熱舎が東京白熱電燈球製造株式会社へと改組されると、長富は同社の取締役役に就任しました。続く明治30年5月には、東洋護真工業株式会社（東京機械工業株式会社）において専務取締役社長を務め、経営の中枢を担いました。

明治35年5月には東京電気株式会社の専務取締役社長に迎えられましたが、同年12月に

社長職を辞し取締役役に退きました。さらに明治38年1月には取締役を辞任し、監査役に就任して以後、逝去までその任にあたりました。

晩年の大正8年1月、糖尿病を患い杏雲堂病院に入院しましたが、同年2月26日に72歳で生涯を閉じました。

なお、長富直三は東京電気株式会社以外にも幅広く事業に関わり、旭電化工業株式会社の創立に参画したほか、富士生命保険株式会社、内国生命保険株式会社など複数の企業で取締役を務め、明治・大正期の産業発展に多方面から寄与した人物でした。

コラム

第4代社長・田村英二の略歴

田村英二は天保14年（1843年）10月、徳島県勝浦郡勝占村に生まれました。田村仁三郎の次男として育ち、若くして郷里の公共活動に関わるようになります。明治12年には府県会制度の創設に伴い、勝浦郡選出の高知県会議員となり、地域行政に携わりました。

翌明治13年には、士族授産を目的として寸燐製造所「徳潤社」を創設し、自ら社長としてその経営にあたりました。以後、実業界に活動の場を広げ、明治26年には日本麦酒株式会社の監査役に就任し、明治27年には明教保険株式会社を創立して監査役を務めるなど、多方面で経営に関与しました。

東京電気株式会社では明治34年12月に同社の監査役に就任しました。翌明治35年12月には専務取締役社長に選任され、極めて困難な時期に、経営の中心として会社運営を担いました。明治37年7月には千寿製紙株式会社の監査役となり、翌年には取締役となり、明治40年1月に離任しています。

明治43年1月、田村英二は東京電気の専務取締役社長を離任し、取締役として支える立場になりました。その後も実業界における経験を生かしつつ晩年を過ごし、大正4年11月2日に逝去しました。享年73歳でした